
MEMORY × MEMORY

荒野 蛮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MEMORY×MEMORY

【Nコード】

N7381P

【作者名】

荒野 蛮

【あらすじ】

現代に生きる普通の女子高生ハルは、ある朝目覚めると異世界のお姫様になっていた！！そしてわけもわからぬハルに問答無用で突きつけられた見ず知らずの隣国の王子との婚約。そこに世間をにぎわす悪党コンビの影が！！今、静かに世界を賭けたハルの記憶を巡る魑魅魍魎たちの戦いが始まるうとしていた。。。

一章 ハル姫（前書き）

これは、俺が高校のときに書いたものなので。熟成（という名の放置）5年もの大雑把リメイクになります（笑wもとは、いつもつるんでいる友達をイメージしたキャラクター??あるいはこの子こんなキャラすきそうだな〜っていうキャラを登場させて始めたものだったんだけど、描いてゆくうちにどんどんかけ離れていったので。面影も何も無いからそこらへん気にしないで読んでくださいまし（苦笑。ロゼ、松モアゼル、女帝様、姫に捧げる。協力してくれたロゼに、心から感謝!!

一章 ハル姫

一章 ハル姫

その朝、ハルは全く知らない部屋の天蓋付きのベッドの上で目覚めた。日当たりの良い、白い壁の広い部屋に一人きり。アーチ型の窓からは、青空が見える。どうやら今日は晴れのようにだが、そんな事はどうでも良い。

ここは、どこなのッ？

ハルはベッドから降りて、ふらふらと白いカーテンが掛かる窓辺へと移動した。窓硝子に、青空を透かしているような自分の姿が、ぼんやり映る。そして、初めて自分がネグリジエを着ている事に気がついた。

ハルは普段パジャマを着る。いったい、いつ着替えたのだろうか？ 風になびく黒い髪も、こんなに長く はなかつたはずだ。

しかし、窓の外を見下ろしたハルにとって、これらはほんの些細な出来事ではないように思えた。

ここは、どうやら高い塔のてっぺんのようにだった。

そして、眼下には全く知らない街が広がっていた。見た所、車やバイクといった物は見当たらない。電信柱も無ければ、蜘蛛の巣のように張り巡らされたケーブルも無かった。おそらく、どの家にもテレビや電話、パソコンなどといった物は無いであろうことが、上から眺めているだけでも容易に想像することができた。

とてものかなその街並みは、歴史の授業で勉強した中世のヨーロッパを思わせる。その向こうには、真っ青な海が広がっていた。

間もなく、ハルはベッドに戻るなり眠りにつこうと躍起になった。今、この状況が仮にただの夢であるのなら、この世界もまんざら悪くはないと思う。しかし、頬を撫でた風の感触が妙にリアルだっ

たことが、ハルを一層不安にさせていたのだった。

それからハルは、この夢からどうにか抜け出そうと、あらゆる事を試みた。瞼を思いきり閉じてみたり、あるいは「夢だ夢だ夢だ…！」と、何かの呪文のように唱えてみたり。

しかし、ハルは一向にこの夢（少なくとも、そう信じている）の世界から抜け出せずにいた。そして、最後にベタではあるが、恐る恐る頬をちぎってみると…。当然の事ながら、その部分にじんわりと痛みが広がった。

夢じゃ、ない。

コン、コン…。

その時、突如何者が扉を叩く音が鳴り響き、ハルの心臓は飛び上がった。

慌てて毛布の中に身を埋めるハル。俯せの状態、毛布と枕の間から扉の方を窺う。すると、にわかには扉が開かれて…。

現れたのは女中とおぼしき女性だった。

（きっと、秋葉のメイド喫茶に行けば、あんな格好の人がいるのだろう…。）

ハルの悠長な想像とは裏腹に、現状はあまりよろしくない展開へと転がってゆく。

女中は真つすぐにハルを見つめている。部屋にはベッドしか家具らしい物が無い以上、隠れ場所など盲目見当が付いてしまうのは当然の事だった。

まずい…。

ハルはハツとして枕に顔を埋め、毛布に完全に隠れた。

しかし、次の瞬間には、虚しくも毛布はバサリと剥ぎ取られていた。

恐る恐る見上げた視線の先には、ハルを見下ろす女中の顔がある。女中は怒っているのか、はたまたうんざりしているのか解らないが、険しい顔付きをしていて…。彼女の左頬にある大きな傷跡が、その表情をより一層際立たせていたのだが、ハルは場違いにも「きつと

触れてはイケない傷なのだろうな」などと彼女の傷の事について考えていた。

今がそんな場合でないことぐらいは、明らかである。

「ご、ごめんなさい！！あたし…」

しどろもどろに、ハルが何も言い終えない内に、女中はフウと盛大な溜息を漏らした。

「姫ッ！！朝食のお時間ですと、何度もお呼びしているではありませんかッ！！お具合が悪くなされたかと心配して来たのですよ！？その様子では、どこにも異常はございませんね？」

一気にまくし立てる女中。その言葉に、ハルは一瞬耳を疑った。

「あたしが姫！？うっそだあっ！！あなたは誰ですか？」

「あなたは誰ですか？」なんて。ハルが女中の知る“姫”でなければ、それこそ向こうのセリフではないか。

女中はハルのセリフにキョトンとした表情を浮かべ、不意にクスクス笑い始めた。先程の剣幕からはおよそ想像のつかない、優しいような顔だ。と、ハルは思った。

「何をおっしゃっておいでですか。私は姫が赤ん坊の頃からお世話させていただいているのですよ！？お忘れになられたとでも？」

およそ、“姫”の冗談に付き合っただけで笑っている、そんな所か…。見え透いた冗談。さぞ、可笑しい事だろう。

続いて、女中はご丁寧にも“初めまして”の自己紹介を始めた。

「スザンナですよ。スージーとお呼びになられておいでますけれどね。ついでを言いますと、あなた様は、このウインディアの姫。ハル姫でございますよ。来週の日曜日、隣国フローリア王子、バースリッジ様と御婚約される御身にございます！！」

その口調には、少なからずおどけた調子の響きがあった。しかし、ハルはおどけている場合では無い。

「婚約！？バ…？何とかって、誰！？」

スージーは「御冗談が過ぎますよ！」と言って、相変わらずクスクス笑うばかりで、「仕方の無いお姫様ですこと！！」などと口々

に語りながら、ハルをベッドから引つ張り出す始末。ハルは、彼女にこれは冗談では無いのだ！という事実を信じさせる術を見つけれないまま、手を引かれるにまかせ部屋を後にした。

見ず知らずの男と結婚するなんて、最悪だ。頼むから、その王子とやらが理想の男であるようになって賢沢は言わないから。せめて善良な男であってくれ！

深紅のカーペットが敷き詰められた長い廊下をスージーと共に歩きながら、ハルは心の中で神に縋るように祈っていた。

広い広々い大広間に、長い長いテーブル。やがてハルが連れて来られた朝食の席。そこに腰掛け、早々に食事を始めていた面々は、おそらくハルの家族と呼ぶべき人物達なのだろうか。それは、あくまでも“姫”の家族であり、ハルの慣れ親しんだ家族とは違う人物達だった。父、母、それにおそらく妹。家族構成は、ハルの家と同じ。しかし、父は国王であり、母は妃、妹もハルと共に姫という各々の地位と権力が備わっている。

「ハル、どうしたの？具合いでも悪いの？」

お姫様がハルを気遣う。それは妃ではなく、一人の母親の顔だった。が、ハル自身はこの人達の事を知らない。果たして、本当にここにいっても良いのだろうか？

「あ…はい。夕べはちょっと夜更かしをしてしまったので…。」
気が引ける思いで、そう答える。嘘を言っているわけではない。

夕べは確かに自分の部屋で妹と共にゲームをして、それから遅くまで机に向かつて絵を仕上げていたのだ。しかし、また妹と共にゲームを…、あるいは未完成の絵を完成させる、その機会がまた訪れるのかどうか。今のハルには見当もつかなかった。

あたし、元の世界に戻るのかな…。

パンを一つ手に取る。

泳いだ視線が、スージーとかち合った。

「姫、」

パンをミルクで胃に流し込み、早々に朝食の席を立ったハルは、

広間を出てすぐ呼び止められた。

間もなく、スージーがハルから少し遅れて広間から出て来た。

「何か、おありになられたのですか？よろしければ、この私にお話くださいな…？」

ハルはスージーに連れられて庭に出た。色とりどりの薔薇が見ごろを迎えている。ふと背後を見上げると、大理石で造られた見事な城が目に入った。ここが自分の家だなんて、全く信じられない。

濃厚な薔薇の香りが、余計に夢の世界を思わせる。

すれ違った庭師の若い男に、スージーがお茶の用意を頼んでいる。男は、にこりと笑って了解すると、城の中に消えた。

花いっぱい広い庭には、綺麗な池があり。浅瀬に設えられた飛石を渡ると、中島にはこれもまた小洒落た椅子とテーブル。

ハルとスージーはその椅子に腰掛け、しばらくぼんやりと庭を眺めていた。やがて庭師の男がティーセットと菓子の入ったバスケットを持ってくると、二人のお茶会が始まった。

「それで、いかがなされましたか？」

ハルはこんな話を話した所で、スージーが信じてくれるような気はしなかった。しかし、このまま誰にも話さない訳にはいかないだろう。今のところ、ハルが唯一気を許せそうな人物はスージーしかいなかった。

いや、スージーなら。もしかしたら理解者になってくれるかもしれない…。

そんなささやかな期待を胸に、ハルは口を開いた。

「あの…、あたし。急にこんな事を言っつてびっくりしちゃうと思うんですが、…あたしは別な世界からこのお姫様の身体に来てしまったみたいなんです。あたしは、ただの女子高生で。」

「ジョシコウセ…？」

ああ、この世界には高校も無いらしい。スージーの頭上に？マークがたくさん浮かんでいるのが見えるような気がした。

「つまり、…なんていうか。スージーさんが知っているお姫様で

はないという事…？なんです…が…。」

後半、ハルの声は消え入りそうなほどに小さくなっていった。普通に考えたら、頭がイカれているとしか思われなような事を、今、ハルは打ち明けたのだ。果たしてスージーはどんな反応を示すだろうか？

また、御冗談を！

しかし、スージーは思いの外神妙な面持ちで。

「姫の身に何が起きているのか存じませんが、姫の不安な気持ちはお察し致します。何も心配ございません。いつでも、この私がついております。どうやら、記憶喪失になられておいでのようですね？」

「記憶喪失…？」

そうしておくのが、今の所はベストなのかもしれない。

そして気付いた事は、ハルが神妙だと思っていたスージーの表情は、彼女の悲しみであったこと。おそらく、このお姫様にも今まで培われた記憶があり、思いであり。ハルの意識の進入により失われたそれらは、スージーにとっての宝物だったんだろう。

姫が記憶喪失になったという噂は城内に瞬く間に広まり、そのおかげでハルは知らない顔をしていても困る事もなければ、不審がられることも勿論無かった。スージーはハルを城中連れ回しては案内をしてくれた。またある時は、街の娘を装って、城下を見てまわったりもした。

石畳の道に、馬車が行き交い、鶏達が豆を啄む。水売りがセディックと呼ばれる巨大な牛で、これもまた大きな水瓶を引き、水を求めて集まって来た人々の瓶を満たしていた。市場には食材を始め様々な品々が並び賑わっている。

「平和ですね」

ハルが焼き菓子を頬張りながらしみじみ語りかけると、スージーは「とんでもない！！」という風に顔をしかめた。

「昼間はそうかもしれませんがね。夜ともなれば大変物騒な世の中ですよ。」

そこでスージーは、今世間で騒がれている二人組の悪党の話しをしてくれた。盗み恐喝何でもござれ。近頃勃発している殺人座談も、彼らの仕業だという。どうやら、どこへ行っても世の中が物騒な事には変わらないらしい。

お城の生活はやってみれば思いの外快適なもので、欲しいものは対外の物なら手に入った。無論、テレビゲームやパソコン、携帯電話などといった類いの物は無いのだが。基本的に生活に困ったり、ひもじい思いをすることもまず無かった。自分が一応ではあるが王族の一員である以上、当然といえば当然なのだが。なんだか悪いな……と思いつつ、女中達に囲まれてちやほやされるのは、満更嫌ではない。「姫」と呼ばれるのも、向こうの世界でやたらそう呼んで来たおかしな奴がいたために、免疫がついていた。

ハルがようやく城の生活に慣れてくるのと共に、バースリッジ王子との婚約の日がいよいよ間近に迫っていた。

そのバースリッジという人物については、ハルより2歳年上の上のとも知的で教養があるという事以外、性格や気質について彼の人柄を詳しく知る者は誰もいなかった。

「たとえ姫が隣国へ嫁がれても、姫のお傍に使えさせていただきませう。」

スージーがそう言ってくれる事が、ハルにとってなによりの心の支えだった。

女性が世継ぎになれないのは、ここでも同じらしい。姫であるハルの役目は、結婚してどこか大きな国に嫁ぎ、この国ウインディアの良き縁組を果たすこと。所謂、制約結婚というやつだ。隣国フロリアとあらばなおさらの事。未来永劫安泰だと、城内に留まらず国中の人々が喜んだ。王族に生まれると、色恋ざたとは孤立無縁になるらしい。それはハル姫の場合でも例外は無い。

見ず知らずの王子との不本意な結婚式は、いよいよ明日決行とな

る。

まさか、その式でとんでもない事態が巻き起こるなんて、この時のハルには全く知るよしも無かった。

今までの出来事は、ほんの序ノ口でしかなかったことを思い知らされることになる。

二章 花嫁の失踪

二章 花嫁の失踪

ハルは純白のドレスに身を包み、薔薇のブーケを抱いて、今まさに式場はザリーナ大聖堂へ向かっていた。大型の美しい装飾が施された馬車は、双子通りをゆっくり走る。人々が道の両端に詰め寄せている中、城の兵士達は警備に当たり、その空からは鳥使い達が花びらのシャワーを浴びせていた。

そんな中、民衆の歓声に半場カーテンの後ろに隠れていたハルだったが。同車しているスージーに促され、やむなく窓から顔を出して笑顔で手を振りながらその祝福に答える事になった。

夕方晚く、馬車はようやくザリーナ大聖堂に到着した。

大聖堂は、至る所カラフルなステンドグラスに彩られ、幻想的に光り輝いていた。大聖堂前の広場には、おそらく国中の人々が詰め寄せているのだろう。それこそ、大勢の民衆がハルの婚約を祝福しに集まっていた。

人の波が及ばない池。その中央は双子の噴水の像が、ぼつんと二人だけ孤立しているように見える。

程なくして、馬車が停車した。

ハルは馬車を降りるなり、民衆達の歓声に包まれた。その狂信的とも思える忠誠心に圧倒されながら、ハルは笑顔を張り付けて聖堂への階段を登る。

堂内は外にもまして人が溢れていた。

馬車を降りてから堂内の一室で親族と合流したハル。お妃様や国王陛下、妹に当たる姫君が、各々ハルに祝辞を述べる。それは、王族階級など無縁とも思われる。家族水入らず、最後の団欒といったところだ。

お母さんが涙を浮かべてハルを抱きしめ、頬にキスをくれる。それに対するハルの心情には温度差が生じており。本来ならば、これは本物の“姫”が受けるべき愛である。それについて少なからず後ろめたさを感じながら、彼らの娘を、あるいは姉を演じるハルだった。

やがて使いが部屋に式の開始を告げに訪れ、ハル達は本堂へと向かった。花の冠を被った可愛らしい少女達が、ハルのドレスの端を持ってくれる。

やがて本堂にたどり着く。

そして、扉が開かれると共に、ファンファーレを掻き消す程の大歓声が堂内から湧き上がった。場違いだと思いつつ、さながらビツクリ箱を連想しながら。ハルは一行と共に、民衆の波をかのモーゼの伝説のように、人の波を二つに隔てている道を祭壇に向かって歩いて行く。

祭壇上にはフロリアの王子こと、間もなくハルの夫になるうとしているかのバースリッジ王子が既に登壇していた。身長は、それほど高くは無いが、少なくともハルよりは数センチありそうだ。それとも、ヒールが高めの靴を掃いているからか。あるいは彼の頭上に鎮座している王冠がそう見せているだけだろうか？顔の方はというと、けして不細工では無い。細面の輪郭に、やたら整ったパーツが所定の位置にくつついている。美男子といえば、確かにそうだが、外見に差し支えない程度につり上がった目尻と稟としたブルーの瞳は、彼の傲慢さやプライドの高さを表しているようだ。彼を少しばかり大きく見せる由縁はそこにあるように思われた。もしも同じクラスにこんな男子がいたら、少なくともハルからは話しかけたりしない類いのタイプだ。

彼は、どこか近寄り難いオーラを放っていた。

今更「嫌だ」と言っても、後戻りは出来ない。ハルには到底想像もつかない大きなものが、逃げ道さえも遮っている。

ハルの背後で扉が閉められた。

それはまさに、あらがい様も無い、宿命とも言えるべきものだった。

ハルが登壇すると、いよいよ式が開始された。

様々な祝辞は、卒業式やら何やら。そんな類いのものを思わせるほどに退屈なものだったが。今、ハルの気持ちは、そんな事も意に介さないほど、暗く沈んでいた。

そして、いよいよ二人、契りを交わす時が来た。

この場で、「夫と共にあらゆる苦難を乗り越え云々……」といった契りが交わされる事は、無い。契りは、互いの血印で行われる。王族の婚約に必要な誓約書に、薬指の先に十字の傷を付け、その血をもって印をする事によって、この婚礼の儀における誓約が完了する。その血印が押された瞬間から二人は結ばれるわけだが……。

まるで、時間の流れが変わったようだった。この世界に着てからというもの、驚くほど時は淡々と流れていった。それが、急にゆっくりと、おそく感じられるのだった。

祭壇の上に捧げ、聖水によって清められたナイフが法王の手からバースリッジに手渡される。そして、台の上には例の誓約書が広げられた。

両者の間に愛情のカケラも無いことは明白。

そんなことお構い無しに、自らの指にナイフを突き立てるバースリッジ。

ハルは、その瞬間彼が見せた不適な笑みを見逃さなかった。この婚約の裏に在る何かを、ハルは垣間見たような気がした。

バースリッジが誓約書にしっかりと血印を押ししたのを見届けると、法王によってその傷口に綿が貼られ、ナイフが消毒された。

そして、ついにナイフはハルの手の中に渡って来た。

ハルはその鋭い刃先を見つめると、とても自分の指を傷つける勇気が失せてしまう。現状はともあれ、仮にも絵を描き、ピアノを弾く指だ。大事にしたい。

血印を押しかねているハルに、バースリッジの視線が注がれた。その刺さるような視線を感じながら、ハルは神様を呪った。しかし、いつまでもこうしている訳にはいかない。

ハルは意を決して、深呼吸。

その後、ナイフを握り直すと、いざ薬指に刃先を突き立てる…。
ガシャーン！

瞬間、青銅内は混乱と絶叫に包まれた。

結婚式にしては場違いな大音量と共に、聖堂で一番大きな天井のステンドグラスが盛大に割られ。色とりどりに煌めく破片が堂内に詰め寄せた人々の頭上にバラバラと降って来たのだ！

そして、壇上に二つの影が降り立ち、そのうちの一人と目がかち合う。

「白馬の王子様、只今参上つと！」

銀の髪色をした青年が、ふざけた調子でハルに向かって言った。しかし、その青年が普通の人間でない事は、ハルの目にも一目瞭然だった。

「お…鬼だつ！」

ハルが口にするまでもなく、民衆の中から悲鳴があがった。青年の豊かな銀の髪の間から、二本。天に向かって長い角が生えている。いよいよ主要人物が勢揃いした壇上。その下で、堂内は大パニックに陥っていた。中には、落ちて来た破片で怪我をした人もいる。さらには、皆が皆一つしか無い扉に殺到したために、それでまた怪我人あるいは死人を出していた。そんな事はおかまいなしに、このおめでたい喜劇は続行するらしい…。

「キサマら…！」

バースリッジが悪態をつくのが聞こえた。

「姫、早く血印を！」

怒気を孕んで向けられたその言葉に、ハルは圧倒されて動けなかった。状況が状況ではあるのだが…。何をこの王子は焦っているの

だ？ハルにはそれが不審に思えた。

ハルがそんな思考を巡らせたのは、ほんのつかの間の事だ。しかし、気付いた時にはハルの手からナイフはもう一人の男によって奪い取られていた。

「そうはしません…」

この一部始終を物影から見ていた法王が、精一杯の勇気を奮い立たせてこの男に言い放つ。

「…、ここは、聖地ですぞ！！このような凶行、神は許されぬ！！」

「おいぼれが、いい度胸だ！」

男の眼には、明らかかな嫌悪が現れていた。それが、この一人の老人に向けられたものなのか、それとも老人の信仰の中にいる神に向けられたものなのかは定かでないが。

男は二人を一瞥すると、祭壇に掲げられた光りのシンボルに向け、ナイフを放ったが、それが見事中心の宝石を砕いた事を男が見届ける事は無かった。

瞬間、ハルは男に抱えられて高く跳んでいた。

どうやら、この男も普通の人間ではないらしい。

「ハンター！」

バースリッジの呼びかけに、城の兵士とはまた別の、ボーガンを構えた部隊が聖堂内になだれ込んでくる。

果たしてハルの存在を意に介さぬように、銀色の矢が次々と放たれた。

ハルは、この矢はおそらく男にはもちろん自分にも向けて放たれているのだと察した。

しかし、その時にはすでに男と二人、二階はバルコニーの影に降りたっていた。

「ここなら、矢は届くまい。」

「あなた、だれ？…ですか…」

おもむろに口を開いたハルに、男はチラリと視線を向ける。また

しても彼の頭上に「？」マークが見えたような気がした（スージーの頭上にみえたそれと同じもの！）。

あるいは「！」マークなのかもしれない。少し困惑したような、その視線は、やがて少し悲しげな色に変わり…。

「あなたの服従者とも言うっておこうか…」という、暗い声が続いた。

「カギだ。あやつはロスト。リーチェアの命であなたを助けに来た。

」

カギと名乗る男は、下の様子を窺うと、パチンと指を鳴らした。すると、割れたステンドグラスの穴から無数のコウモリの大群がなだれ込んできて、兵士やボーガン部隊を襲い始めた。

つかの間、矢の雨が止む。

「カギ、行くぞ！」

コウモリ騒動に乗じて、鬼の青年ロストがバルコニーに跳び上がってきた。

行く？何処へ？

ハルは身構え、バルコニーの端に移動する。スージーが言っていた二人組の悪党というのは、おそらくこの二人に間違いない。

「ハル姫、俺らと一緒に来るんだ！！」

「あなた達、何者なの？あたしを何処へ連れていく気？」

「あんたは姫じゃないんだろ！？」

「！」

鬼の青年ロストが、ハルの驚いたような顔を見て、「Bingo

」と言った。

「なぜそれを！？」

しかし、背後から無数の足音がバタバタと近づいてくるのが聞こえてきた。

「追っ手が来る。詳しいことはリーチェアの城で話そう。今は、黙ってついて来るんだ。」

「ついて来るんだ！」も何も無い！！ハルはロストにそう言われる

なり、強引に抱えられ。

ぴよんとバルコニーを離れると、三人はコウモリ達のひしめく空の闇へと姿を消した。

三章 魔女の城

三章 魔女の城

ハルはカギに抱えられ、屋根から屋根へ跳びながら街外れの城壁までたどり着いた。

この街カステルワールは、城を中心にぐるりと城壁に囲まれている。出入口となる4つの門は、おそらくすでに兵士達に固められていることだろう。

「この壁、どうするの?」

すると、ハルはゆっくり降り降ろされた。

久々の、地面。

「しっかり捕まって。」

そう言われ、ハルはカギの背におぶされると、カギの首に腕をしっかり巻きつけた。

なんと、カギはその状態で城壁を登り始めたのだ。さながら蜘蛛のように。爪を立てて、ザクザクと結構な速さで登って行く。気がつけばあつという間に地面から遠く離れていた。

…手を放したら、落ちる。

無論、ロツククライミングなど、未経験だ。ハルは必死でしがみついていた。すぐ下には、ロストの銀色の髪が揺れている。

下を見ていたハルは、不意にロストと目が合った。しかし、ロストがそわそわと視線を反らせる。

やがて、ハルは自分がまだウエディングドレスを着ている事に気が付き、カツと顔が熱くなるのを感じた。

下から丸見えではないか!

「ちよつと、見ないでよ!」

すると、下から「ごめん!」という声が聞こえてきた。

そうこうしているうちに、城壁の上に到達し、ハルはカギの背から降ろされた。

「すまない…」

カギはそう言いながら、続いて壁を登り切ってきたロストをジロと一瞥したのを、ハルは目撃した。

「だから、ゴメンって！」

カギの冷たい視線を避けるように、ロストの視線は泳いでいた。そんなロストの動揺が可笑しくて、ハルは思わず笑っていた。

「もういいよ、許してあげる！」

「ちえ、カツコわりの…。あ、俺の名は…」

「ロストでしょ？カギから聞いたよ。」

今度はロストがカギを一瞥する番だった。しかし、カギは涼しい顔でそれを受け流している。

「ちえっ、カツコわりのっ！」

ロストが小声で繰り返した。

城壁の上から眺める街は、ひっそりと眠りについていて。とても一騒動起こっているとは思えない。闇に包まれた街の中心に尖塔の黒いシルエツトが天をついている。そこから少し離れて、いまだ明かりが燈っている建物が、先程までハル達が居たザリーナ大聖堂だ。ハルは、その明かりを眺めながらスージーの事を思った。

眠りにつく街の中にポツンと明かりが燈るザリーナ大聖堂が、おそらくははまだ眠れずにいるであろうスージーの姿と重なる。とても優しくしてくれたのに、何も言えなかった事が悔やまれる。きつと、とても心配している事だろう…。

「さて、と！」

ロストが服を掃うと、取り直して口を開いた。

「安心してよね。俺達ハルの味方だからさ。今からリーチエアっていう魔法の屋敷にハルを連れていく。あの海岸の辺りに在るんだ。」

ロストが指差すその先には、闇が広がっているばかりで、陸と海と空の堺がすっかり同化していた。闇を辿ると、いつの間にか空に

到達している。あと数日もすれば満たされるであろう月がみなもに映り、まるで月が二つ浮かんでいるように見えた。

「さて、急がねば。陽が昇る……。」

そう言われて再びカギに抱き抱えられたハルだったが、あることに気付いた時にはもう遅かった。

「あつ、ちよ……まつ……！」

ハルが声を上げるより早く、カギの足は壁を放れていた。

絶句！！

数秒後には地上に降り立っていたものの、その数秒間はハルにとつて途方もなく長かった。

カギは着地を失敗する事さえ無かったが。ハルの心臓は耳元で、早鐘の如く、いつまでも鳴り続けていた……。

首に巻かれた腕に力が入っているのを感じたらしい。「そういえば……」とでも言うようにチラリとこちらを見つめている。ハルは、そんなカギの目とかち合った。

「姫、お怪我は……？」

「……、心臓が、止まるかと、思ったわ！」

「それはそれは……お赦しを。」

今度は、丁重に地面に降ろされたハル。足の裏に感じる土の感触がとても愛しく思えた。

さて、これからどうやってあんな遠くまで行くのだろうか？

周囲を見渡すと、ハル達の位置からほど近い場所に2頭の獣の姿が目についた。

ハルがぼうつとしている間に、二人はその獣に近づいていく。

「えーっと、この怪獣は……？」

「ああ、こやつらはクルツトといって。よく走ってくれる。」

カギが、ほとんど闇に溶け込んでしまうほどの黒毛のクルツトの頭を「あー。こらこら！」と、あたかも乗馬用の馬でもあやすかのような手つきで撫でている。はたまたロストの方を見やると、カギのとは対象的にぼんやり浮いて見えるほどだから、おそらく純白の

クルットか。ロスとはすでに跨がっていて、こちらに歩いてきた。

どうやら、ハルもこの獣に跨がる事になるらしい。カギやロストが扱っているのを見る限り、そんなに危ない生き物には見えないけれど。少なくとも見えないだけで、想像以上に凶暴で危険な生物であることはその口元からのぞく大きな牙から容易に想像ができた。そんな事を察しているそばで、カギが黒クルットに跨がった。

「さあ」と、手を指しのべられる。

握り返したものの躊躇していると、カギがそれを察してその手をそっと引いた。

「初めて、のようだが。怖がる事はない。しっかりと捕まっています。」
ハルはクルットの上に引っ張り上げられると、カギの前に跨がり、鞍にしっかりと捕まった。

三人はカステルワールの街を後にした。

西の空が明るみ始めた頃、ハル達一行は海岸沿いを走っていた。前方は切り立った崖の先端に、魔女の城が尖塔の黒いシルエツトを月明りに浮かべている。まるで、ホラー映画の中でも入り込んでしまったような心持ち。

ほとんど明け方近く。ハル達はその岬にたどり着き、いよいよ城門を潜った。昼の城があのでウインディア城なら、このリーチエアという魔女の城はまさしく夜の城といえるだろう。明け方近くの薄暗い岬にたたずむその城は、不気味なものだった。

門の裏手にクルットを繋ぎ、いよいよ城内へ。両開きの大きな扉を、カギはいとも容易く開いてしまった。

シャンデリアの暗い明かりが揺れる玄関ホールの赤黒い絨毯の上を横切って。連れて行かれたのは西の塔。ハルは最上階に位置する部屋を一つ与えられることになった。

岩肌のブロック壁に囲まれた円形の空間に、大きめの四角い窓からは朝日が差している。高価そうな円形の絨毯は、落ち着いた色合

いの真紅。部屋の隅にはハンモックが。そして、小さな木製のテーブルと、椅子が一つずつ部屋の隅に置かれている。

「ま、しばらくゆっくりしていると良いよ。おなかも空いたたる？」
そして、新たにロストの手によって、小ぶりの白いパンが詰まったバスケットと、木苺のジャム、湯気の立ち上る暖かいミルクのポットとマグカップがテーブルの上に加わった。

「朝ごはんだ」

ハルの緊張は、それで一気にほぐれたようで。思わず笑みがこぼれた。

「・・・さて、わたしも地下に戻って眠りに着くとしようか・・・」

「やがてカギが姿を消し。ロストもハルに女物の部屋着を手渡すと「お休みなさい」を言っ て部屋を出て行った。」

部屋に一人取り残されたハルは、まず窮屈なドレスを脱ぎ、部屋着に着替えた。それからやっと落ち着いて暖かいミルクを口にすると、急に強烈な眠気が襲ってきた。体が疲れている。一度にたくさんのが起こりすぎたのだ。ハルの頭は今だに混乱をきたしていたのだが、ここは安全な場所であるという何の根拠も無い確信だけはあった。今は、まずゆっくり休むことが先決だ。

食事を済ませると、ハルはハンモックの上に横たわり、窓の外を眺めた。

金色の光が、荒野を満たしてゆく。東の空はまだ薄暗いが、広大な荒野のはるか向こうに見えるウィンディアはカステルワールの町や城は、新しい光の中で朝を迎えていた。

自分は何処に居るべきなのだろう？ここまでできてしまったが、果たしてカギやロスト、リーチエアという魔女のことを鵜呑みに信じても良かったのだろうか？まあ、今更そんなことを考えたところで、すでに巢の中。どうにもならないのだが。

ハルは、この先何が自分を待ち受けているのかと思うと、途方も無く真つ暗な気持ちになった。希望はまず抱けるような状態ではな

い。どうすれば元の世界に帰る事が出来るかという、ハルにとって最大の問題も当分解決しそうには無かった。考えれば考えるほど、考えるべきことが増えていくような気がした。少なくとも、リーチエアという魔女は何かを知っている。

ハルは盛大な溜息をつくと、それっきり考えることを放棄した。今は、とりあえずぐっすり眠りたい。知らない世界に突然紛れ込んで、こんな騒動に巻き込まれながらも、今夜の宿と食べるものにありつけるという奇跡に感謝しようではないか。それに、もしかしたら自分の家で目覚められるかもしれない。

そんな期待を胸に、ハルの意識は深い深い闇の中に沈んでいった。

翌朝、ハルは目覚めた。しかし、そこは塔の上にある円形の部屋のハンモックの上だった。そして、ハルは窓の外を見て初めて今夜である事に気がついた。此処に時計は無かったが、おそらくは眠りに着いたのが朝としても、有に十時間以上は眠っていたことになる。

ハルはとりあえず塔を降りて大広間に出た。しかし、誰も居ない。そういえば、カギが地下室にいたはず。ハルは広間をぐるりと見渡すと、下に伸びる階段を見つけ、降りていった。

狭くて暗い廊下。明かりは、一つだけ在る松明。天井で何かが蠢いているものがある。おそろおそろ眼を凝らすと、それが無数のコウモリであることが解った。先ほどから何かを踏んでいるような感触がするのは、おそらくこのコウモリたちのフンや死骸なのだろう。思わず、足が止まる。気味が悪い。

しかし、こんな所で立ち止まって居たくは無い。そして、一人で居るのも嫌だった。

廊下の突き当たりに鉄の扉が一つある。カギはきつとここに居るのだろう。

ハルはカギの名を呼びながら、扉を開けた。扉に鍵はかかっていなかった。中は真っ暗で、何も見えない。が、開いた扉から廊下の

松明の明かりが差し込んで、その長方形の明るい部分に在るモノが横たわっている。

それは、黒い木製の棺だった。

その上に、ハルの長く伸びたシルエットが重なっている。

「カギ……、居るの？」

此処は死体の保管庫なのだろうか？どうやら部屋を間違えたりしない。こんな大きな城なのだから、地下室が一つしかないはずは無いではないか……。

「……カギ？」

とにかく、誰かに一緒に居てもらいたかった。

すると、ゴト！という物音と共に棺の蓋がずりずりと開いた。

「ッ！きゃーっ！」

ハルは踵を返して一目散に走った。何を踏もうがお構いなしに、暗い廊下を、コウモリの群れの下を駆け抜けた。ハルの頭の中では、あの棺の中からぐちゃぐちゃのゾンビが這い出て、今にもハルの後を追いかけてくる。あるいは、朽ちかけたミイラかもしれない！

一段抜かして階段を駆け上がる。あと少しで出口。

広間に出られる！

と、思ったその時。出口から差し込む四角い光の中に、何者ものかのシルエットがあった。

ロスト？……いや、違う。

近付くにつれ、それがドレスを着た女性であることがわかってきた。ハルの足は女性の前まで来るとおのずと止まり。ハルは逆光に目を細めながら彼女を見上げた。

彼女もまた、暗がりの中に居るハルを眼を凝らしてしげしげと眺めているようだった。やがて女性がハルのことを認識すると、間もなくしてハルの頭上から少しきつい調子の声が降ってきた。

「ウインディアのハル姫というのは、あなたのことかしら？」

四章 怪物たちの主

四章 怪物たちの主

コツ、コツ。と、リーチェアのヒールの音。

彼らこそが、いわゆる魑魅魍魎というに相応しい存在なのだろう。ロストは傍目からして鬼の子。そして、カギは吸血鬼だったのだ。

「大丈夫、彼らは私の番犬よ。あなたに危害を加えるような事はさせないわ。」

リーチェアはそう言って、ゆっくりと歩を進めながら広間の端に立ち尽くすカギを見やった。

「す……、すまない。」

カギが視線をそらせつつ、ボソリと呟くように言ったのが聞こえた。

「そんな、あたしこそ。ごめんなさい……、」

ハルの発した言葉は、消え入るように小さくなっていった。それは、少なからず抱いた吸血鬼への恐怖心から来たものだった。リーチェアはそれを察したらしく、その冷たい口元に微がうかんだ。

「……まあ、そういう私も貴女から見ればフツウじゃないのではありませんよ？」

ぎよつとしたハルの顔を見て、再び満足げな微笑を浮かべたリーチェアに、ハルはどうにも好意を持てる気がしなかった。

「まあ、仕方の無いことね。わたし達がこうして集ったのは、いわば運命的とも言える事よ。」

リーチェアの涼しい声には、どこかハルをあざ笑うかのようなおどけた響きがあった。

「私達も、おそらくは貴女のように。あちらの世界からこちらの世界に移された身なのでしょうね？」

ポツリと呟くような彼女の声。何時しかリーチェアの足は止まっていた。

そして、天昇高く。月明かりをすかして幻想的な蒼に輝くステンドグラスを見上げながら、リーチェアは続けた。

「けれど、わたし達は前の世界の記憶を失ってしまったわ。そして、書き換えられた記憶と共に、いつの間にかこの世界に生きている。」

「いったい、私達はどこから来たのかしらね？」というリーチェアの問いに、ハルは答える余地も無かった。

「あ、あの。みなさんはいったい何をしようとしているんですか？ やつとの思いで声を発したハルの問いに、リーチェアは振り向いた。その瞳はどこか悲しみを湛えているように見えた。

「貴女には改竄されていない記憶が在るわ。」

「・・・、？」

「この世界は・・・、」
声を発したのは、カギだった。

「この世界は、いわば人の想像が作り出した架空の現実世界。そして、その創造主がかのフロリアの王子、バースリッジなのだ。」

「なにそれ？ここはあの王子様の夢の中だったってこと？」

「夢、か。それならまだマシではないか。いずれ目覚めるときが来ようっ。」

カギの微笑。その口元に、おぞましい犬歯が覗いた。

いくら現実離れた事でも、目前にした吸血鬼の口から発せられてしまうと思わず納得せざるを得ない。それだけに、ハルはよけいに恐ろしくなった。

「此処はバースリッジが創造した偽りの世界。しかし、この世界に生きる全ての者から真の記憶が失われれば、偽りも真となるっ？」

ハルは背筋がぞつとするのを感じた。

「あたし、記憶を消されちゃうところだったの？」

「それだけじゃないさ。きつと籠の鳥にされて外にも出してもらえなくなつてたかもしれないね。」

「ほんと、あぶないところだったな！」と、ロスとが笑いかけた。ハルとしては、まったく笑い事ではない。

「コレが何を意味しているのかお解りかしら？」

リーチェアが探るような眼でハルをみやる。ハルはその視線にすこしどきまぎしながら、がんばって頭を働かせた。

バースリッジがハルの記憶を削除しようと躍起になる理由として思いつくこと。おそらく、ハルの持つ元の世界の記憶がこの世界に何かしらの影響を及ぼす可能性があるからなのだろう。それは、バースリッジにとって不利益なこと。そしてその術は、ハルの手の届く範囲に在る。でなければ、わざわざ誓約結婚だなんだと面倒臭い段階を踏んでまで記憶を削除しようなんてことはしないだろう。領土を広げたいのなら、もっと他にも豪族は居るはずだ。

「・・・ようは、あたしがこの記憶で何かをすれば、この世界はバースリッジにとって不利益な方向に動く・・・ってこと、かな？」

「不利益も不利益。貴女の記憶はこの世界を元に戻すための、いわば鍵のようなものよ。」

それが事実なら、おそらくバースリッジ本人も、ハルと同じく真の世界の記憶を持ち続けている人間の一人なのだろう。あの世界によっぽど嫌気が差していたのかもしれない。ハルの家にあったテレビは、連日朝っぱらから気のめいるようなニュースばかりを映していた。例えばなんらかの事件、事故の当事者であったり、家庭に事情があったり。あるいは心に闇を抱くような人種にとっては、お世辞にも住み心地のよい世界であったとはいえないだろう。

「・・・なるほど、よくわかったわ。」

ハルは頭の中を整理しながら、慎重に言葉を続けた。

「要するに、えーと・・・バースリッジはこの世界を壊されたくないからあたしを狙っていて。リーチェアさんたちはこの世界を元に戻すためにあたしをさらってきた。そういうことね？」

「ご名答！って、さらったただなんて人聞きわるいなあ。救出したって言ってもらいたいね！」

「だってまるでアニメの一場面みたいだったじゃない！」白馬の王子、只今参上！」だったかな？」

「う、うるさいな！」

ロストが今更恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「そ、それに。これから俺たちはバースリッジを討ち取って世界の創造権をハルのものにしなくちゃいけないんだぞ。」

「討ち取る？・・・、殺すってこと？」

「つまりは、そういうことになる。想像し創造するための脳がバースリッジの命と共にある以上、そうせざるを得ないだろう。言って考えを変えてくれるものなら、面倒は無いのだ。そんなことを実現させてしまふ石の製作者、ニコル＝サーダと言う錬金術師がバースリッジの背後に居る。その者も捕えて、創造権の移動の方法を聞きださねばならない。」

打って変わって、カギの口調は重苦しかった。

単に殺すといったところで、そこらへんのチンピラ一人殺すのはわけが違う。相手は一王国の王子なのだ。戦うとなれば、無論軍隊が動いてくる。確かにカギもロストも強いが、王国の軍事力相手に叶うとは到底思えなかった。

「軍隊とやりあうなんて、いくらあなた達でも無理だと思っただけど・・・。」

「そうね、無理だね。」

リーチエアのあまりにもあっさりとした答えに、ハルは拍子抜けしてしまった。

「え？」

「いくら無能な人間ごときが相手でもね。弱い虫けらどもは数にものを言わせてくるものよ。まさに、そのとおりだね。おまけに、実際に相手にするのは人間そのものではなく、人間があやつる鉄のおもちや。厄介なことに、背後には魔術師達も控えているはず。一筋縄にはいかないでしょうね？」

「じゃあ、どうするの？」

「スパイ作戦よ！」

リーチエアの瞳が悪戯っぽく光った。

「まずは敵の懐に潜入して情報を得ることが先決。行ってくれるかしら？ロスト？」

「え、オレが？」

急の名指しにロストとは驚いて、リーチエアからカギに、そしてハルにと視線を走らせる。

「わかるわね？」と念を押されて、ロストは観念したようだった。「けど、見つかったら大変だよ？敵の巣の中に一人で乗り込むなんて・・・。」

「大丈夫だよ、ハル。オレはそんなへましないからさ！角なら、ほら。消せるんだぜ？」

そう言つて、ロストは頭上に伸びる二本の角を消して見せた。

「髪は、適当に染めればいいだろ？」

「それじゃあ決定ね。早速、明日には決行に移しましょう。」

何の躊躇もなく、そんな決定を下したリーチエアの無情さに、ハルは青ざめた。

この城ではリーチエアが全ての中心だった。そして、絶対の決定権を持っているのもまた、彼女だった。

それからロストは明日から始まる昼の生活に体内リズムを合わせるため、「もう一眠りする」と言い残し、西北の間へと行ってしまふ。カギは「喉が渴いた」と言つて、夜の街へと出ていった。

吸血鬼の喉の渴きについて、カギが夜の街へ何をしに行ったのか。それは考えずとも想像のつくことだが、ハルはあえて何も干渉することは無かった。

ここでは、少なくとも彼らにしてみれば、日常に行われている普通のことなのだ。

しかし、しかし。そうとは解っているものの、一度湧き上がった彼らへの嫌悪感は消えることは無かった。

翌朝。星もまだ煌く、朝焼け前の暗い空の下。ロストは城を出て行った。

この三人の中で、人間のものではないにせよ唯一暖かい血がめぐっていると思えたロストが去ることに、ハルは少なからず心細い気持ちになった。それ以上に、ハルは、ロストに会えるのがコレで最後なのではないか？と思うと切なくなつたが。ハルの心情とは裏腹に、ロストは意気揚々と城を去って行ってしまった。

城門に並んで見送っていた中から、あっさりと身を引いたのはやはりリーチエアだった。

「外は寒いわ、中に入って温まりましょう、ハル？・・・カギも、陽が登るわよ？」

「ああ・・・、姫も、さあ戻りましょう。」

「うん・・・。」

口を付いたのは気の無い返事。返事こそしたものの、ハルの足は一向に動くことは無かった。

「ロストにカトリーナを持たせた。じきに返事がかえってくるだろう。」

とつくに誰もいないと思つた背後から声がしたことに驚き、振り返るとそこにはカギがいた。

「あなたのゲテモノ好きもたまには役に立つじゃないの？」

その後ろに、黒いマントを手にしたリーチエアが城からこちらに歩いてくるのが見える。

「ここに居るのもいいけれど、風邪引かないようにね？アナタも、灰に還らないように！」

そう言つて、カギにローブを纏わせ、フードをぐいと目深に引き下げた。続いてハルの肩にも毛糸のカーディガンを羽織らせてくれる。

暖かくて、ほのかにバラの香りがする。

結局ハルたちは、ロストが米粒ほどまで小さくなって、地平の果て、荒野を駆け抜けた砂塵にかすれて消えるまでその背中を見送ったのだった。

五章 五人目の住人

五章 五人目の住人

果たして、ハルはロストを一人で行かせなければよかったと後悔した。あれから一週間も経過したのに、待てどくらせどカギの伝書コウモリカトリーナは戻ってこなかった。

ロストはどうしてしまったのだろうか？ 掴まってしまったのだろうか？

それについてはカギも気がでない様子で、陽もまだ墮ちきっていない時間帯から窓辺に立って、溜息については窓の外を。ロストが去った荒野の果てをぼんやり眺めていた。

ハルは、いつものように東の塔の円形の部屋にあるハンモックの上で目覚めた。

例の如く、カギは窓辺に座ってカトリーナの帰りを待っている。

「まだ、こないんだね？」

「・・・、ああ。」

「今夜も、帰ってこないのかな？」

「どうだろうな？」

カギはまた、大きな溜息をついて窓の外に視線を向けた。

その日の空は晴れ渡って、美しく満ちた満月が銀色の光を地上に降り注いでいた。

「やっぱり、人を集めるべきだよ。」

「そうだな。」

そう答えたカギの声は、この間血を飲んできたにしては生気が無い。

「五人ぼっちで、何が出来るのやら・・・。」

誰にともなく投げかけられた問い。物憂げなカギの呟きは、誰の返答も無いまま、虚空に消えた。

それ以前に、ハルはいま何をすべきかすら解らなかった。それはおよそカギも同じよう。おそらくリーチェアの頭の中には、いくつかのプランが立てられているのだろう。

全ては、ロストが帰ってきてからでなければ、何も始まらない。

やがて、カギはリーチェアに呼ばれて部屋を出ていった。

階段を降りてゆく二人をぼんやりと見送ったのち、再びハンモックに戻ったハルは、盛大な溜息と共にごろりと横になった。きつとこの憂鬱はカギから感染したのだと思った。気が付くと、窓の外を、もう見えないロストの背中を見つめていた。

しかし、不意にカギの言葉が脳裏をよぎった。

「五人ぼっちー。」

果たして、あたしたちは五人も居ただろうか……？

やがて、ハルの足は部屋を抜け出し、広間へと向かっていた。

どこかの怖い話や都市伝説のような話だが、この世界では何でもありえる。吸血鬼や、鬼の子を目の当たりにして、幽霊にかぎって居ないなんてことは考えにくい。フツウに考えれば、それらの存在はハルにとつての脅威に過ぎないのだが。カギやロスト、リーチェアが仲間である以上。カギが姿名前も知らぬその人物を含めハル達を5人と言った以上、その5人目は仲間であると考えていいのだろう。

考えがそこまで及ぶ頃には、ハルの中の恐怖心はだいぶ薄れていた。やがて、恐怖は好奇心へと形を変え、ハルの足を突き動かしていた。

しかし、いわば巨大なお化け屋敷と言っても過言ではないこの城の中で、その一人を探し出すのは至難の業だ。ハルには手当たり次第に足を運ぶことしか思い浮かばなかった。

そして、ハルは目に付いた地下へと通じる階段を降りていくこと

にした。

広間の明かりが届かなくなると、持ってきた手持ちの蠟燭に火をともした。階段は次第に暗さを増し、さらに地下へと下っていく。

しばらく降りていくと、突き当たりに出て。そこには両開きの古い扉がハルの目前に膚かっていた。一応、ノックを試してみる。

こんこん……。

心なしか、心細い音がした。

返事は無い。

扉を少し、開けてみる。覗いたそこには、漆黒の闇が広がるばかり。床は真紅の地に金色の糸で刺繍が施された高価そうな絨毯が敷き詰められている。どうやらそこは地下広間のようだった。

ハルは恐る恐る中に足を踏み入れる。

すると、何者かがハルを四方から取り囲んだ！

どこまで続いているのか、果てしなく遠くまで何者かの持つ明かりがずらっと並んで揺れている。

「あなた達は、何者?!」

口をついて出た悲鳴のような問いに、答えは無かった。じつとその場に凍りつくハル。しかし、彼らは何をしてくる気配も無い。

「あなた達は、わたしたちの……、リーチエアの仲間なの?」

ハルはゆっくり歩を進め、広間の中央のあたりまで歩み出ると、彼らもゆっくりと動いているようだった。前方の一人が、ハルの歩に合わせて歩みよってくる。

そして、蠟燭の放つオレンジ色の光の輪の中に、彼らの顔がぼんやり浮かび上がり。ハルは思わずひっと息を呑んだ。

彼らハルを取り囲んだのは、蠟燭を手に揃って恐怖に引きつった顔をしたハル自信であった。

壁は全て鏡張りになっていた。

高い天井には、三つのシャンデリアが、蠟燭の淡い光をおびて。無数のハル各々の世界の頭上でキラキラと輝いていた。

今までの一人芝居に一人赤面し。どうやら、ここには何も無いよ

うだとさとつたハルは、震える溜息を一つついて。反射に反射を重ねて増量したハル達は、やはり揃って地下広間を後にした。

そして、地下広間はまた闇一色の空間に戻った。

それからハルは、自分の部屋がある東の塔を除く三つの塔にも登ったが、そこに異常は見られなかった。

しかし、探す場所ならこの広い城の中、いくらでもある。先は長そうだ。そのころようやくハルは気が付いた。何も、カギはこの城の中に五人目が居るなんてことは言っていない。もしかしたら、口ストのようにどこかに出払っている可能性だってあるはず。もしかしたら、今自分がしている行為は無駄でしかないのではないか？ そう思い始めたところで、ハルの探索が終わりになる事はなかった。

好奇心の赴くままに、ハルは階段を駆け上がる。

広間を登り、二階、三階とくまなく部屋を探索してまわった。やがて夜もすっかりふけた頃、ハルの探索は最上階へと達した。そして、ひと際大きな両開きの扉にたどり着いた。扉の向こうには、三つ目の広間があった。

どうやらここは物置になっているらしい。ハルは広間に足を踏み入れるなり、一つの確信を抱いた。

ここに、誰か居る。

広間の奥に設えられた部屋に、明かりが灯っていた。

部屋の中に踏み入るハル。石畳のゴツゴツした床には、他の部屋には見られなかったシミや汚れが目立った。その壁面には、客室とはまた違った鉄の扉が並んでいる。鉄格子つきの小さな覗き窓。

それは、さながら牢のように無機質で。

その時、一番奥の扉から誰かのすすり泣く声が聞こえてきた。まさか、ホントのほんとに幽霊出現か？不意に湧き上がった恐怖を頭の中から閉め出して。ハルは勇気を奮い立たせるように咳払いを一つついて声をだした。

「・・・誰か、居るの？」

その声は、思いのほかはつきりとして強く、その部屋に僅かの余韻を残して消えた。

すると、パツタリすすり泣く声がやみ、ずりずりという衣擦れの音、続いて金属の鎖がじゃらりと冷たい音を立てた。そして、小さな覗き窓の格子に傷だらけの血で汚れた両の手がかけられ、ぬつとその人物が顔を覗かせた。

「きみは、だれ？」

震えた声。彼は何かにおびえているようだった。

顔を出したのは、ハルより少し年上らしい青年だった。彼はいつからここに閉じ込められていたのかすっかりやつれはて、顔面にも無数の引つかき傷を作っていた。

「・・・、だれ？」

繰り返される問いかけ。動揺に固まっていたハルは、それedyouやく自分を取り戻した。

「あ・・・、あたしは、ハル。あなたが何人目にここに来たのかは解らないけれど、安心して。あたしもリーチエアの仲間よ!!!」

「ウィンディアのお姫様?! あいつら、ホントに、さらってきたんだ・・・。僕はザークス。僕もカギに連れてこられたんだけど・・・。」

「まあ、カギが?! なんてコトをするのかしら? 見損なつたわ!!!」

「いや、仕方ないことなんだよ・・・。」
「ザークスは力ない声でそういった。」

しかし、ハルの想像が及ぶには、カギがこんなことをする訳など一つしか考えられなかった。おそらく、得物が居ない時の水筒代わりといったところか? きつと、夜な夜な彼はカギに血を吸われているのだろう。それを思うと、ハルの中に言い知れない怒りがこみ上げてきた。

「吸血鬼・・・、なんて野蛮な種族!」

「いや、そういうことじゃなくって・・・。」

「あなた、何か悪いことでもしたっていうの?」

「それでもないんだけど・・・、」

「あなたを食い物にするつもりなのよ！本当に、野蛮な種族！」

ハルは皮肉をこめてそう言い放つと、こんどは何とかしてザークスをここから連れ出すことは出来ないものか？と考えをめぐらせ始めた。しかし、それについてはそれほど考えるまでもなく容易に見つけ出すことが出来た。

「なによ、鍵があるじゃない！もっと早く気付くべきだったわ。」

それは、ハルが入ってきた入り口のすぐ脇の壁にぶら下がっていた。

「今すぐに、ここから出してあげるから！」

そう言うなり、ハルは鍵の束を手に取り、一つずつ順番にザークスの牢に合う鍵を探していた。そして、鍵も14個目に達した時、カチャリという小気味よい音を立てて錠は外れた。

「開いたわよ！・・・、ザークス？」

ハルは、重い鉄の扉を引いた。部屋の中は、粗末な椅子と机、ベッドと、ぼろぼろの毛布が一枚あるだけだった。その中で、ザークスは奥の壁にもたれて座っていた。

「ひどいところね？」

ハルは続いてザークスの足かせを解除した。

しかし、ザークスは壁にもたれ座り込んだまま動こうとはしなかった。

ハルは立ち上がり、壁についた無数の爪痕を指でなぞりながら、躊躇するザークスを見やった。

「よっぽどこから出たかったんじゃないくて？」

「ありがとう、ハル。でも・・・、そんなことしたら三人に怒られちゃうよ？」

「怒るのはあたし達でしょう！」

「さあ、いくわよ！」と、ハルは半ば強引に手を引いて、ザークスを牢から連れ出したのだった。

あらためてザークスの全体像を眺めると、奴隷のようなぼろきれ

同然の服をまとい、その露出した肌には、よっぱどひどい仕打ちを受けていたのだろう生々しい傷跡が見え隠れしている。

「もう、大丈夫だからね！」

勇気付けるハルに、ザークスは少し困ったような表情を投げかけただけだった。

牢を出てからというものの、埃の積もった家具達の脇をすり抜けながら、ハルはなおもザークスの手を引いて歩き続けていた。

「やっぱり、戻ろうよ……」

ザークスは、先程からそれしか言わなくなっていた。

「いいから、あたしに任せて！あなたを自由にさせてあげるんだから！」

そんなやり取りの繰り返しに、少し苛立ちを覚え始めたハルだったが。カギたちに何をされるかわからないと思うと、こうなってしまうのも仕方ないことなのだろう。彼は、おびえているだけなのだ。それにしても、物置にしては広すぎるこの広間。やがて牢の明かりも届かなくなり、足元がおぼつかなくなってきたハルは、ポケットからマッチを取り出すと、再び蝋燭に火を灯した。

「は……ハル……」

「だから、大丈夫だってさつきから……！！」

「う、ううう……あああああっ！」

「?!?!?!」

突如ザークスの様子が急変した。激しいうめき声を上げてじたばたと身悶え始めたのだ。

「ザークス、どうしたの？大丈夫？ねえ、ザークス！！」

ハルの必死の呼びかけに、ザークスの応答はない。このまま死んでしまうのではないか？という勢いでもだえているザークスを前に、ハルはすっかり動揺をきたし、ただ立ち尽くしている。

「どうしよう?!」

不意に視界に入った開けっ放しの扉から、広間へ通じる廊下。そしてようやく誰かに助けを求めようという考えに至った。

一刻の猶予もない。ハルの足は、広間に向かってひとりで駆けだしていた。

「待っててザークス、今誰か呼んで来るか」　　「！！」

振り向きざまザークスに視線を戻したハルは、ぎよっとして思わずその場に凍りついてしまった。

闇の中、黄色い残酷な眼光が凍りついたハルの姿を捉えている。

今、ハルの目前。至近距離にいるのは、毛深い剛毛に身を包み、鋭い鉤爪、恐ろしい牙をむきだしにしたおぞましい獣。それは、他でもない、狼。うめき声は唸りへと変わり、今にもハルに襲い掛かるうと身構えている。

何ということだ、ザークスは獰猛な狼男だったのだ！！

第六章 人狼

第六章 人狼

「キヤーツ!!」

ハルが一目散に逃げ出すと、人狼と化したザークスは凄まじい唸りを上げて追ってきた。廊下に出るとすぐさま一番目の角を曲がり、広間への階段を下へ下へと一段ぬかして駆け下りる。しかしザークスは十数段あるうかという階段を一気に飛び降りてハルとの距離を縮めてきた。

二階の踊り場まで差し掛かろうとしたその時、ザークスはハルの頭上を飛び越えて、ハルの前方は踊り場の中央あたりに着地。ついにハルは追いつかれてしまった。

踵を返して三階へと引き返す。

その時、不意にハルの右足に激痛が走った。そのままものすごい力で階段半ばから踊り場まで引きずり下ろされる。

右足に食い込むザークスの鋭い爪。さらにもう一方の前足が、ずしりとハルの背中を踏みしめ、爪を立てた。それでもハルは、何とか逃れようと必死でもがく。しかし、もがけばもがくほどに爪が食い込んでくる。

しまった、動けない!!

階段の角という角に全身ガタガタとぶつけた上に、したたか頭を打って意識も朦朧としている。鋭い足の痛みに遅れて、打撲の鈍い痛みがじんわり神経を伝わってきた。ザークスの重みは容赦なくハルを押しつぶす。じわりじわりと食い込む爪。身を切るような激痛と内臓を吐き出しそうな重みにうめきながら、ハルはひたすら意識を失うまいと歯を食いしばって耐えていた。

生臭い温かな吐息。はっ、はっ、という息遣いが、耳に近い。ハ

ルの顔のすぐ傍には、ザークスの濡れた鼻と鋭い牙がある。眼光是ギラリと残酷さを増し、その表情はまるでおぞましい笑顔のようだ。まるで得物を捕まえた至極の喜びに満ち溢れているかのように見える。

殺される　！

ついに覚悟を決めたその時。ハルの上からザークスが吹っ飛んだ！！

「カギ！！」

やっとの思いで状態を起こすと、すぐ目前でカギがザークスともんどりうって取っ組み合っていた。上になり、下になり、両者共に相手に止めを刺そうと必死だ。

「姫、逃げてッ・・・！！」

本能が逃げると叫んでいるのに、ハルの足は一向に凍りついたまま動かない。

「姫ッ！！」

その呼びかけに、ようやく自我を取り戻すと、ハルは痛む足を引きずりながら必死で階段を登った。

無我夢中で飛び込んだ三階の一室。そこは、もうずいぶん使われていないアトリエだった。そこにはたくさんさんの巨大なキャンパスや、石膏でできた立像がいたるところに立っていて、それらの多くは白い布がかぶせられている。さながら暗がりの中に漂う幽霊のようでもあった。

ハルは描きかけのキャンパスから白い布を拝借し、頭からすっぱりかぶると、立像の並びに参列した。布の目は思いのほか粗く、ほつれた小さな穴から部屋の中を見渡すことができた。

息を整え、心を落ち着かせるハル。しかし、痛む身体はガクガク震え、足もすくんでしまい、まるで自分のものでは無いかのように思えた。

遠くに聞こえる鈍い音。短いうめき声。ザークスの咆哮。

カギがまだ戦っている。きつと、きつとカギがザークスをやつつけて迎えに来てくれる。それまでの辛抱だ。だから、それまで……

ガシャーン！！

その時、凄まじい音がして先程まで聞こえていた乱闘の気配がなくなつた。

何も、聞こえない。ハルは思わずその場にへたり込んでしまった。長い長い静粛。耳の奥で高鳴る鼓動。安心、それとも不安？ 言い知れない胸騒ぎ。この孤独の中で、ハルはカギの安否が気がかりでならなかつた。

間もなく。カチャツ、という音と共に、アトリエの扉が開かれた。そしてアトリエに入ってきた人物の姿にハルは息を呑んだ。

そこに入ってきたのは、おびただしい鮮血に濡れた人狼、ザークスだつた。

果たして、カギはどうなつてしまつたのだろうか？

ハルは息を潜めてその様子を布越しに見つめた。

ザークスは、鼻をひくつかせながら足音を忍ばせてゆっくり部屋に踏み込んできた。一つ一つの立像に鼻を近づけて、ハルを探している。

言い知れない不安と静かな恐怖が、ハルの心を締め付ける。

ガタン！！

ザークスは五体目の立像も違つと解ると、ついに癩癩を起こして立像をなぎ倒した。その後、バリバリと石膏を噛み砕く音が続く。ハルは息を呑み、溢れてくる涙を必死で堪えた。

ザークスは一体、また一体と立像を調べ、ついにハルの近くにまでやって来た。

ガタン！！バキツ、バキバキ……。

ハルのすぐ隣の立像が破壊された。ザークスの巨大なシルエツトが、立像の首を噛み砕いているのが見える。ここで動いてしまったら最期、あの立像のように噛み砕かれてしまうだろう。

そしてついに、いまや無残にも粉々に破壊されてしまった立像に飽きたザークスは、いよいよハルに向かって真っ直ぐ歩み寄ってきた。ハルの周囲をぐるりと回って、匂いをかぎながら様子を伺っている。

へたり込んだハルの目線の位置に、四つん這いになったザークスの眼があつた。ザークスの粗い息遣い、喉がなる音、床を引っかく爪の音が間近に聞こえる。

ザークスが、ハルの顔面に鼻を押し付けてきた。すぐそこに、ザークスの獰猛な血にまみれた紅い牙が在る。むせ返るほどの、生臭い血のおい。ハルの心臓は口から飛び出しそうなほどに高鳴っていた。この音がザークスの耳に聞こえやしないか気がでない。ましてや、再びザークスが痼癢など起こそうものならひとたまりも無いだろう。

ガール……。

ザークスがハルの眼と鼻の先で唸る。ハルは息を止め、この時ばかりは神様とやらの祈らずにはいられなかった。あたしは、ここで死ぬのだろうか？

しかし、ザークスは唸っただけで、これは象であり動かないのだと確信すると、そっぽを向いて他の立像へ行ってしまった。

ハルはしばらく目を見開いたまま、息をするのも忘れて硬直していた。

危機一髪とはこのことだ。おそらく、口の周りに付いた血のおかげで匂いがわからなかったのだろう。

ガタン！！バリバリ……。

ああ、逃げなければ。

ハルは、ザークスが自分から離れていくを見計らって今度はどうにかしてここから脱出することを考えた。無論、見つければ砕けた立像の二の舞。この命がけのかくれんぼに勝つにはどうしたらいいのдарう？そもそも、かくれんぼに勝ち負けは無いのだが。

ハルは、ザークスが他の立像に夢中になっっている隙を伺ってゆっくり立ち上がった。そして、ザークスの目を盗んでは一歩、また一歩と扉に向かって移動を始める。

こんなに恐ろしいだるまさんころんだなんて、まったくシャレにならない。

ガタン！バキバキバキ・・・

「ウオオオオオオオオオオッ！」

ハルははっとして足を止めた。

咆哮。

ザークスがまたしても癩癩を起こしたのだ。立像をバリバリ噛み砕く音。荒々しい唸りを上げながら、バキバキと手当たり次第に立像を破壊していく。

ゴトン！

不意に足元に飛んできた立像の首。

瞬間、ハルははじかれたかのように扉に向かって駆け出した。

振り返るザークス。逃げ出したハルを残酷な眼で捉えると、ザークスは手近な立像をなぎ倒すやはちきれんばかりの勢いで猛然と追いかけてきた！

このままでは、また追いつかれてしまう。

逃げながら、ハルは必死で頭を働かせようやく一つの考えにたどり着いた。ザークスを外に誘い出し、その隙に城の中に逃げ込んでしまうのだ。いくらザークスでも、あの大きな扉に鍵をかけてしまえば入ってこれないはず。夜が開けたらザークスも人間に戻る。それからでも、充分策を練られるだろう。なんにしても、先ずはこの危機的状况をなんとかしなければ、確実に命は無い。

一縷の望みに全てをかけて、足の痛みを堪えながらひたすら廊下を駆け抜ける。

しかし、先程の階段まで差し掛かると、ハルは思わず足を止めてしまった。

おどり場で、無数のガラスの破片に埋もれるようにして横たわるカギの姿があつたのだ。その傍らで、壁にかけられていた大きな額縁は、無残にバラバラになって転がっていた。

「カギ……カギ……？しっかりして、カギ！！」

その肌は、氷のように冷たい。全身に傷を刻まれ、腹部には特に深い爪痕が見えた。壁に飛び散つたおびただしい血痕。真紅の絨毯は、一面どす黒く色を変えていた。もはやカギの身体には、もう一滴の血も残っていないかのようだった。

「カギ、死んじゃったの？」

応答は無い。ハルの目の端に、涙が浮かんだ。

ガルルルル……。

不意にザークスの唸り声がすぐ背後に聞こえた。振り返ると、階段の上からザークスがハルを見下ろしている。

ハルは逃げた。逃げて、逃げて。というとう広間にたどり着くと、正面玄関の大きな扉にすがりついた。

しかし、無情にも門が重くてびくともしない。

ハルは、自らの非力さに絶望した。怪力もなければ魔法も使えない。ましてや獰猛な人狼の前に、人間は哀れなほど無力な生き物だった。人間の、ちっぽけなハルの力では、こんな状況に太刀打ちする術など、あるはずが無いではないか。

ハルが扉の前で絶望的に立ち往生している間に、ザークスは広間に降り立ち、全速力でハルに襲いかかるうとしていた。

もう、ダメか……。

追い詰められたハル。猛然と迫ってくるザークスを前に、なす術もなくその場に凍りついたまま。いよいよ目前まで近づいている最

期の時に思いをはせた。

どうか、せめて一瞬で死ぬますように。苦しみませんように・・・

!!!

ザークスが後ろ足で床をけり、ハルに飛び掛る。

ダンッ！！

ザークスに突進され、扉にたたきつけられたハル。体の上で、ザークスが暴れている。爪が、牙が、ハルの柔らかい皮膚を裂く。もはやなす術もなく、痛みを受け入れるほかない。そして、いよいよ首筋に鋭い牙と生暖かいザラリとした舌を感じた。

ついに、死をも受け入れなければならぬ時が来てしまったのだ！

最後の時を、今か今かと震えながら待つ。しかし、その時はしばらく待っても訪れることはなかった。

ハルの上にいるザークスは、もはやぐったりとして動かない。

ハルは何が起こったのか、まったくわからなかった。重たい頭をわずかに傾け、二階のバルコニーを見上げると、霞む視界にボーガンのようなものを構えたりーチェアの姿があった。

「ハル、大丈夫かしら？」

青い顔をして、今にも階段を駆け下りてくるリーチェア。

その声に張り詰めていたものがプツッリ切れたハルは、真つ暗な意識の中に堕ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7381p/>

MEMORY x MEMORY

2011年2月27日01時55分発行